

HUGE

hi-end style magazine.

【ヒュージ】

No.046
JULY 2008

7

KODANSHA
定価

680 YEN

平成20年7月1日発行 年2回 1日発行
第6巻第6号

デザインは死んだのか？

DESIGN
is DEAD





建築家として店舗設計なども手がけていたこともあるアダム・シルヴァーマン。2003年にロサンゼルスに工房、アットウォーター・ポッターを設立。栃木県の益子で作陶を行い、展覧会を開催するなど、日本との接点も深く、民藝にも造詣が深い。妻であり、アーティストでもあるルイズ・ボネットとの共同作品も話題だ。 www.atwaterpottery.com



新しいムーブメントを
先導する最重要人物

ADAM SILVERMAN

50年代のモダンクラフトを彷彿とさせる溶岩釉を使った作品をはじめ、そのユニークな作陶スタイルで注目を集める陶芸家、アダム・シルヴァーマン。彼は家族を愛する静かな男だった。

陶芸家、アダム・シルヴァーマンは、間違いなく現在のカリフォルニアモダンムーブメントを象徴する男だ。その作品はクラフトやデザインという枠組みを飛び越え、「アート・パーセイルマイアミ」で高い評価を獲得するなど、その活躍にアート関係者も熱い視線を送る。

そんな彼を訪ねて、郊外の小さな街、アットウォーターへと向かう。そこは、ロサンゼルス市の喧嘩が喧のように静かな街だ。工房の外で出迎えてくれたアダムと挨拶を交わし、早速その中へと案内してもらおう。空間が予想以上に小さかったため、少し驚く。小学校の教室ぐらいの広さだろうか。部屋の大部分を、作りかけの器やスケッチを描くための大きなテーブルが占拠し、その周囲を取り囲むように、小さな電気窯やろくろが置かれている。壁面には、愛する家族の写真や雑誌の切り抜き、そして友人のアーティストから贈られた絵などが無造作に「コラーージュ」されている。

「陶芸の魅力は、自分ですべての工程を完璧にコントロールできること。自分で考え、手を動かす。それだけでいい」

作陶だけでなく、出来上がった作品の発送までも自分で行うというアダム。きつとすべてに目が行き届く、この工房のサイズ感がちよつといいのだろう。

そんな彼は異色の経歴の持ち主としても知られている。高校卒業後、陶芸と建築を学ぶために進学したデザインスクールでイライ・ポナーツと出会い、やがてピリスティ・ホイーズのマイクD&C、1991年に(XLARGE)を設立。90年代を狂騒のストリートで過ごした。

「アクリンメントのようなものだね。洋

ADAM SILVERMAN at LOS ANGELES

90年代初頭に(X-LARGE)を立ち上げ、ストリートを拠点した男は、ファッションから陶芸の世界に身を転じ、新たなグループを紡ぎ出す。





誰にも頼らず、一人で作業するのが好きだというアダム。窓から差し込む穏やかな光が心地よかった。

服は、陶芸と建築の中間にあるような感じ。デザインは自分でするけど、結局は人の手に頼らなくちゃいけない。それに会社が大きくなるにつれて、僕はビジネスマンになった。子供も生まれたし、ルーツに帰ることになった」

朝9時には、工房に出て夕方5時まで、みっちり働く。そして、週末は家族とゆっくり過ごす。「バンカーみたいだ」と彼は笑うが、その時代の反動が、今のシンプルな生活のベースを作っている。

「抽象的なことを考えるのが、好きなんだ。まず、質感や色のイメージを膨らませて、実験を繰り返す。そして、悪かったら捨てる。ハプニングの連続だよ」

クレーターののような不思議な質感を持った器。指の痕跡を残すフィンガープリントを施したり、釉薬をかけてから表面を削り落とし、再び焼成するなど、彼は今、陶芸の持つ可能性を、自らの感性に従いながら、自由奔放に追い求めている。

「無になるか？ ろくろを回す時はそうありたいと願ってるよ。気がそれると、作品が台無しになってしまうんだ。でも、実際は難しいよ。家族のこととか、何かとストレスも多いからね(笑)」

